書かれなかった寓話

日居月諸

紗江からチャットで声をかけられた時、陸山の手は空いていた。彼女はTwitter文芸部の実務にまつわる忙しさを気にかけてくれているが――部外者に似つかわしくない律義さに、彼は気後れを覚えた――、雑誌作成にあたって編集長がするべき職務は少ない。雑誌の方針の決定、寄稿の依頼、職務の割り振り、進捗状況の確認、発刊のアナウンス……編集長とは実務をこなす部員を統括し、そこでの成果を外部に報告する役割を持った人間を指すのであって、部員が各々の仕事を全うしてくれれば煩わしさを感じることなどほとんどない。

スカイプにログインしていたのも、部員から声がかかった時すぐ応答できるようにするためだった。何事もなければ、部外者とだって話せる。

――お気遣いありがとうございます。今は手が空いているので大丈夫ですよ。

だが、と彼は返事をしながら思った。仮に手が空いておらずとも、一旦仕事を放りだして紗江と話そうという気になったかもしれない、と。紗江からのメッセージに目を通した時、陸山は気後れを覚えた。それほど忙しくもないのに、不相応な律義さでもって声をかけられて戸惑ってしまった。同時に、新田の案件を忘れかけていた自分に気付いてしまったのだ。

文学のことでお話ししませんか。そう書き連ねられたメッセージに改めて目を通しながら、紗江は新田の話題を持ち出すために声を掛けたのではないと確かめる。しかし、相手の意向とは別に、咎められているような気分を覚えた。雑誌を何事もなく発刊させて、新田という部員がいなかったかの如く済まそうとしているのではないか、それと同時に私という存在も忘れようとしているのではないか、それこそ、新田が自らの出自をモデルにした小説から自分の影を消したかのように、全ての事どもをなかったかのように振る舞おうとしているのではないか、と。

それらを踏まえればこれから行う会話は、いかに時間的余裕があろうと、精神的には負い目を伴ったものとなってしまう。

――ありがとうございます。それでは、通話いたしますね。

ヘッドセットを準備しながら、陸山は一呼吸を置いた。考えすぎる必要はない。向こうに咎めるような態度は今のところ見られないし、久しく交流を持っていないのにこちらの忘却が読まれるわけはない。これからの会話はあくまでも共通の趣味をめぐって行われるのであって、共通の知人をめぐって行われるのではない。仮に知人の話題が出たところで、忘却を認めざるをえないならば認めた上で、余計な気負いを覚えることなく、これからの対策をともに考えればいい。

「こんばんは、お久しぶりです」

通りのいい澄んだ声が聞こえてきた。愛想の良い口振りに裏がないことを確かめつつ、陸山はその明快さに一度身をゆだねることにした。
「こちらこそ」
「本当に大丈夫だったのでしょうか？」
「いえ、実のところ編集長のやる仕事はあまりないんですよ。ほとんどの仕事は他の部員がやってくれて、僕がやることと言えばスポークスマンの役目くらいなものです」
それならよかったです、と安堵を表す声を聞きながら、陸山は先ほどの自分の口振りが自慢めいた調子を帯びていなかったことを確かめた。
「ところで、近々『百年の孤独』の読書会が行われるとうかがったのですが」
「ああ、目を通していただけましたか」
言いながら、手元にある大部の書籍を見やった。渦を巻くような一本の道が、両端を煉瓦で出来ていると思しき城壁によって囲まれている。城壁には夥しいまでの黒い三角屋根が設えられ、それらは霧の降りた曇り空へと伸び、ところどころに葉の落ちた針葉樹が植わっている。城壁が建っているのは砂漠だ。砂の地面には風の跡と思しき縞模様が刻まれ、城壁の内側には白いオブジェとも思しき舟に乗った者どもが、螺旋の中心に向かって進んでいるのだか立ち止まっているのだかわからない姿で佇んでいた。
「やはりレメディオス・バロをトリミングした表紙をお持ちなのですね。学生時代は旧版で読んでいたせいで、『作品集』版の表紙では読んだ気にはならないのですよ」
「まさに砂上楼閣という感じで、とてもいい表紙だと思います。マコンドの行く末を暗示している。かといってネタバレではない。本を開く前は表紙に描かれている事にあまり目を向けないけれども、しっかりとした印象は残る。そして本を読んだ後に、表紙に描かれている細部が鮮明に浮かび上がってくる。装丁と内容が噛み合った著作というのは、芸術品としてあるべき姿じゃないかな。芸術というのは、たとえば絵画は絵画、小説は小説、といった具合にジャンル分けされるべきではなく、もっと複合的に出来上がるべきだと、『百年の孤独』の装丁は教えてくれる」
ええ、という声が返ってくる。ともに『百年の孤独』を読み終えていることは明らかだった。
「もしかしてこちらのアナウンスを見て、読もうと思い立たれたんですか？」
これにも肯定してくれて、こういったところでも律義な人なのか、と相手を見上げるとともに、陸山は心置きなく文学の話が出来るだろうという予感に心が沸き立った。
「小説もとても複合的に成り立っていますよね。同じような名前によって続いていく家系が、同じような出来事を繰り返しつつ、繁栄と滅亡を迎えていく。しかもそれらはあくまでも偶然のように継起していって、後から見ていけば必然であったのかもしれない、という具合に

とにかくすべての事が複雑に絡み合っていく」
「それこそ、小説の本来あるべき姿、といったところでしょうか」
「まったくもって」
そう言うと、向こうから微かな笑い声が聞こえてきた。そこで彼は自らの声が勢い込んでいたことを知り、苦笑した。
「でも、改めて読んでよかったですよ。昔読んだ時は物語の筋を追うのに精一杯だったけれど、実際に書き手として読んでみると、あまりに参考になるところが多かった」
「私も昔読んでいた頃はとにかく圧倒されるばかりだったのですが、実際は何も読んでいなかったと思い知らされてしまいました」
「描写の鋭さもそうなんですが、物語の組み立て方についても同様で、序盤を読み進めている間は手垢のついた感じが否めなかったんだけれど、実のところそれは、日本文学があまりにガルシア＝マルケスを模倣しすぎたせいなのではないか、という印象を持ちました」
「そうかもしれないですね。安部公房や中上健次はいわずもがな、影響を明言していない作家達も、知らず知らずガルシア＝マルケスが作り出した型を踏襲しているのかもしれない」
落ち着いた口調に接しながら、それに引き換え自分の声がなんと浮き足立っていることだろう、と陸山は自嘲した。会話をしようとしているのだかわからない一方的な言葉を投げているのに、向こうは当意即妙な言葉で応じてくれる。
「いやはや……」
溜息をつきながら、普段使わない言葉を使ってまで感に堪えぬ様子を表そうとした。それは『百年の孤独』もさることながら、音声だけでしかやり取りができない文学の知識に長じた女にも向けられていた。会話を行う前に覚えた緊張は、最早ほぐれきってしまっている。
「打ち明けると、僕はガルシア＝マルケスに対して好ましくない思いを抱いていたんです。『百年の孤独』はまだ小説を書いていない頃に読んだ。小説を書くようになってから、『予告された殺人の記録』を読んで、この徹頭徹尾計算されたような小説は、はたして小説のあるべき姿だろうか、という疑問を抱いた。勢い込んで、ガルシア＝マルケス、いやマジック・リアリズムは葬らなければいけない、とさえ思い込んでしまった。でも、この小説を読んで、そんな考えは浅はかだった、と思い直しました」
「けれど、そう言いたくなる気持ちはわからないでもありません」
そうした応対の仕方に気配りを感じた陸山は、いや、と差し出された手を断りかけた。しかし、
『『百年の孤独』もあくまで計算によって成り立っている小説でしょう」
と強い口調で言われたので、思わず口をつぐんでしまった。そこで生まれた空白がかつて覚えた感触と同じものだと意識しつつ、ややあって、それはどういう点で、と訊ねると、
「まず、ブエンディア一族が歩んだ歴史は言うまでもないですね。最初に、始祖といってもいいホセ・アルカディオ・ブエンディアが、又

従妹のウルスラ・イグアランと結婚する。そして、彼らから四代下って生まれたアマランタ・ウルスラが、甥のアウレリャノ・バビロニアと結婚する。最初の血のつながった者同士から産まれた子供は、健常な姿で現れましたが、次の血のつながった者同士から産まれた子供は、奇形児として現れてしまった。繁栄の起点となった出来事と、滅亡の起点となった出来事が対照になっているのですね」

「ええ、しかし、それは仕組まれた展開という感じは受けません。蛇行に蛇行を続けつつ、似ているようで似ていない出来事が継起しつつ、四代に渡ってブエンディアの系譜が重なっていき、そのうちに、禁忌とされていた出来事が起こってしまうから、あくまでも偶然の末に一家の秘密に出会ってしまった、という印象を覚える」

「小説としてはありがちな手法ですが、そのありがちな手法をよく咀嚼できているのですね」

ありがちな、という言葉に少し引っかかりを覚えた。確かに訳者も指摘しているように、『百年の孤独』は伝統的な手法によって成り立っている小説だ。全ては予告されており、偶然に継起していると思われる出来事はいずれも必然のものだった……そんな小説はありがちである。だが、訳者に指摘されるのと、紗江に指摘されるのとでは、少しばかりニュアンスの相違を感じた。その相違がどのようなものかは測れなかったが、読書における仲間から聞こえた声は、彼をわずかにムッとさせた。

「まあ、そのあたりは表立って明らかにされているので、計算とさえ呼べないものだと思います」陸山の気掛かりをよそに話は続けられる。

「問題は、表立って明らかにされていない部分……」

「明らかにされていない部分？」

中途半端なところで声が途切れてしまったため、思わず相手の言葉をそのままに発してしまった。

「本当は明らかにされているのですけれどね。ただ、読者は本筋を追うばかりで、脇に続く筋は読み飛ばしてしまいかねないと思うのです。ブエンディア一族が一心不乱に生きている傍らで斃れていった無数の人々を」

それまで明快に発せられていた声が、トーンがそのままであるにもかかわらず、曇りがかっているような雰囲気を帯びた。それまでは全ての言葉が聞き手に向かって届けられていたにもかかわらず、途端に話し手の内側にこもりだした。

「確かに、この小説ではよく人が亡くなる。二代目のアウレリャノ・ブエンディアは革命軍の大佐になって、無数の人々を戦乱に巻き込んでしまった。四代目のホセ・アルカディオ・セグンドも労務者たちと結託してストライキを起こして、鎮圧されてしまう」

ひとまず、投げ出されてしまった言葉を引き取ることにした。これまで好き勝手に喋っていたにもかかわらず、会話を会話として成立させてくれたことへの返礼でもあった。果たして相手からは、そう、という頷きが聞こえてくる。が、

「ただ、こう言ってしまうと語弊がありますが、それらはあるべき犠

牲のようなものですから。アウレリャノ・ブエンディアは、義憤によって革命を企てた。ホセ・アルカディオ・セグンドも、経緯はどうあれ義憤によってストライキを企てた。彼らに従った者も、同じ志を戴いていたわけですから、死ぬことは本望だったと思います。死ぬことを本望としないままに、ブエンディア一族によって殺された者もいた」

そう言われるとようやく思い当たる節が浮かび、陸山は手元の本を開き始めた。しかし、ただでさえ大部の書籍をめくるのは一苦労である上に、万事がめまぐるしく流転する小説の、本筋から逸脱した出来事に行き当たるには一層の苦労を必要とした。このページでもない、この名前でもない、とシラミ潰しに小説のエピソードを当たっていく間、忘却していた出来事を不意に思い起こさせられ、後ろめたさに急き立てられながら記憶を掘り起こすような感覚が陸山を包んでいた。

「たとえば、プルデンシオ・アギラル」聞き覚えのある名前が、澄んだ声によってあっさりと発せられた。「初めの血のつながった夫婦を嗤った男ですね。奇形児が生まれることを嫌って性交せずに暮らしていた夫婦は、噂の的となってしまい、その中でも特にプルデンシオの取った態度は夫の気に障った。闘鶏に負けた腹いせに、これでお前の不能は慰められるだろう、と嘲ったために、彼はホセ・アルカディオ・ブエンディアの放つ投槍に突かれて死んでしまう。憤りの収まらない夫は妻を焚き付けいよいよ性交に及び子を宿すのですが、彼らが改めて愛を確かめ合うきっかけを作った男は、怨霊となって夫婦の下に現れ続ける。自業自得であり、逆恨みといえばそれまでですが、怨霊の影におびえた夫婦がそれまでの町を離れて旅に出たと考えると、歴史の立役者ともいえるわけです。プルデンシオ・アギラルは、マコンドの繁栄と滅亡の、きっかけとなった人物なのです」

陸山がようやくプルデンシオ・アギラルの名前を見つけた時、一旦話は区切られた。紗江の話すあらすじに間違いはなかった。全体のあらすじを述べるだけでも容易ではない小説にもかかわらず、二度読んだ者でも思い出すのに時間がかかった細部のエピソードを滔々と述べてみせる様子に、この女の不気味ともいえるまくしたてるような口調が再び現れた、と陸山は身構えた。

「この小説はプルデンシオ・アギラルのエピソードが示すように、一族だけの歴史を書き連ねたものではないのです。私はむしろ、叙述の数こそ劣るとはいえ、一族以外の者たちにこそ重きが置かれた小説ではないかと思っています。他に例を挙げるなら、一族の滅亡のきっかけとなったアウレリャノ・バビロニアの父である、マウリシオ・バビロニアですね」

ああ、そうか、と陸山は納得の行った口振りを示した。見当は外れているかもしれないが、それ以前に一度紗江の口調に歯止めをかけておくべきだと感じた。

「マウリシオ・バビロニアは、四代目の子孫であるメメが想いを寄せた人だったね。だけど、母親のフェルナンダは娘の想い人を快く思わない。そして、夜這いに来たマウリシオを、仕向けた夜警達の手で殺

してしまう。けれど、彼らの子供は産まれてしまった。後に奇形児を産むこととなる、ブエンディア家の血を絶やすこととなる子供を産んでしまった」

そうですね、という相槌が、自らの話す梗概に間違いのないことを認めてくれる承諾であると解釈しながら、彼は話を進める。

「一族の外部にいる人間を退けることによって、最初は繁栄のきっかけを得るんだけど、二度目は滅亡のきっかけを得てしまう、というわけか。そこにこそ計算がある、なるほどな……」

「さすがですね。私の言いたいことを見事に汲み取ってくださった」

またまた、と照れ隠しに賛辞を払いのける口振りを表しながら、すべての解釈が紗江の口から放たれなかったことに、陸山は安堵を覚えた。これは一種の抵抗でもある。陸山から口が挟まれることのないまま話が続いていれば、ありがちだ、と指摘した紗江の解釈は揺るぎないものなってしまっていたかもしれない。『百年の孤独』に相応の価値を見出している自分さえも、ありがちな人間であると烙印を押されてしまうかもしれない。

たとえそちらから与えられたヒントを駆使しながら述べた言葉であろうと、先読みが出来るからにはそれもまたありがちなのだ、と言外に主張することで陸山は抵抗を示そうとした。あなたは誰にでもわかる一般的な解釈をしているだけであって、『百年の孤独』そのものに宿る固有性を汲み取っているわけではない。どれだけ読もうと読みとりきれない魅力が、この書物にはある。

「ただ、計算はそれだけには留まらないのです」一息つきかけた瞬間に、また澄んだ声が発せられた。「そうした細かな出来事の反復と同様に、大きな出来事の反復がある。枠組みの反復、と申し上げてもいいですが……」

「枠組みの反復？」またも陸山は相手の言葉を繰り返した。

「先程陸山さんが挙げておられた革命のための戦争とストライキ。ブエンディア一族の歴史は、そうした支配への抵抗の歴史ともいえます。中心と周縁の対立、と言うと有り体でしょうか」

有り体、という言葉は言わずもがな陸山の意識を過敏にさせた。だが、稼働速度を高めた頭脳は一方で紗江の述べるだろうことを、おぼろげながらに予測し始めていた。

「結局のところ、マコンドとともにブエンディア一族は滅びてしまい、歴史の忘却に晒されてしまうわけですが、同様に、ブエンディア一族から忘却された歴史もある」

「プルデンシオ・アギラルや、マウリシオ・バビロニアのような、ブエンディア一族から排除された者たちの歴史」

「そう」肯定が返ってきた。「アウレリャノ・バビロニアの闘争は、和平という形で終焉した。ホセ・アルカディオ・セグンドの闘争は、弾圧という形で終焉した。そういった具合に、ブエンディア一族の反抗は国家によって鎮圧されてしまう。同様に、ブエンディア一族も外部の者たちを排除し続けてきたのです。プルデンシオ・アギラルは、夫婦の誇りを取り戻すために殺された。マウリシオ・バビロニアは、

世間体を気にする恐妻によって殺された」
「家もまた国家と同じように共同体であるわけですね。共同体であるからには、外枠めいたものを作って、内側を守らなければいけない。そして、外部の者を排除しなければいけない。ブエンディア一族の歴史は、あたかも国家の縮図でさえありうる……」
なるほど、と陸山は感嘆をもらした。
「鋭い解釈だと思います」
「いえ、これもまた他所から借りてきた言葉を当てはめただけの話ですから」
陸山の賛辞に偽りはなかった。ありがち、という言葉に気を取られて侮蔑するような口調を読み取ってしまったが、考えてみれば現代において小説を書くということは、出揃ったアイディアの中でいかに独自の色を見せていくかが重要なのである。同時に、読者もまた出揃ったアイディアを踏まえた上で、先行する作品との差異を読み取ることが重要となる。
そうした前提を踏まえてみれば、ありがち、という言葉の解釈の仕方に誤りがあったのだ。初めはその言葉に何もかもお見通しである、と豪語するようなニュアンスを読み取った。いっそ、作者の苦労を知らない読者の思い上がった態度であるとさえ思った。訳者の書く、ありがち、という言葉に抵抗を覚えなかったのも、ひとえに訳者は作者の苦労をわかった上でそう書いているのだろう、という予測があるからに過ぎなかった。
今となっては、紗江の発する、ありがち、という言葉は作品の魅力を最大限に取り出すための言葉であったと振り返られる。ガルシア＝マルケスが自らの蓄積してきた知識と照らし合わせながら、それでもなお新しいものは生まれないかと葛藤を続けた、その現場を照らし出すための言葉。
「本当に色んな文学を読まれていらっしゃるのですね」
「好みに任せて読んでいるだけですよ」
「それでも大したものですよ」
陸山は一通りのことを理解した。もっとも、理解したのは『百年の孤独』の解釈に限った話ではない。『抱擁家族』の時もそうだったが、作品を内部から見るのではなく外部から見ていく女の思考はどのような出自を持っているのか、話を聞きながらずっと気にかけていた。そして、ようやく思考の出自が見えてきた。
「紗江さんは自分の体験に基づいて読書をなさっているのですね」
「そうですね。知識はたかが知れていますから、自分の経験に基づいて、これまで読んできた本に頼って読むしかない」
「そういうことではなくて」言いながら、思わず声色が固くなってしまったのを感じた。「あなたは、自らが歩んできた人生に基づいて読書をなさっている」
「と言いますと？」
そうした返事がこちらの癖を真似しているように思われて、陸山は眉をひそめた。同時に、これまで膨大なる言葉を表出させておきなが

ら、今更とぼけることがあるのだろうか、とも思った。
『百年の孤独』を読んでいる間は思い浮かばなかったんだけど、あなたとこうして感想を交換している内に、この小説は新田さんの『横を向いたまま』と似ているところがあると思ったんです」
「あの小説と？」
次にやってきた疑問には、とぼけるニュアンスは含まれていないどころか、明確な侮蔑が現れていた。
「もちろん、プロとアマの差はある。ただ、小説の出来のことは一旦脇に置きましょう。その上で、ブエンディア一族の歴史と、あなたの一族の歴史には、どこか似通うところがある。あなたは自らの一族の歴史を、ブエンディア一族に重ね合わせながら『百年の孤独』を読んだんではないですか？」
一息に言い切ると、続いて沈黙がやってきた。きっとまた強く言い返されると予感していたので、陸山は前のめりになるような困惑を覚えた。しばらく喋り通しであったため、久しく訪れた沈黙は居心地が悪く、何かしらの配慮を用意しなければならないと頭をめぐらしてはみたが、それまで考えていたことを吐き出してしまったがために容易くは言葉が浮かんでこなかった。そうして手をこまねいていると、
「……なるほど、だから新田は私にこれを読ませたのですね」と、ようやく声が聞こえてきた。「学生時代に彼がこう言ってきたのですよ、これだけは読まないとモグリだ、と」
久しく頭に思い浮かべていなかった声が呼び起こされた。アマチュアにありがちな血気に逸った口調、聞き手の心象も構いなしに物事を軽々と断定してしまう口調は、確かにここのところ聞いていない、姿を見せなくなった者のそれだった。
「だから、というのは？」
そう訊ねると、ややあって返事がやってきた。
「確かに、親族のことを思い浮かべながら、この小説を読んではおりました。たとえば、ウルスラ・イグアランは、大伯母と似ているな、だとか、娼婦として男から金を奪い続けた彼女が過ごした青春時代も、どこかブエンディア一族の歴史に似ている、と。陸山さんのおっしゃる通り、だから私はああいう解釈をすることが出来た」
だから、という言葉が再び発せられたが、それは陸山の疑問には答えていない。しかし、向こうの声が、発せられるたびに内側にこもっていくのを感じて、指摘するのはためらわれた。
「僕はピラル・テルネラにも似ていると思った。二代目の兄弟、ホセ・アルカディオとアウレリャノ・ブエンディアの子供を揃って産んでしまう、娼婦のような女」
そこで話を区切った。自らの感想が相手を傷つけることになりかねないと意識されてきて、こう言ってしまうと失礼になるかもしれないけれど、と付け加えたところ、
「いえ、失礼ではないですよ」と強い口調が返ってきた。「初めに断わりましたけど、私は娼婦であった大伯母を誇りに思っておりますので」

「そうだったね」呆れが表れないよう注意しながら言った。「そういえば、ピラル・テルネラは、ホセ・アルカディオとの間に生まれたアルカディオに求愛されたけど、近親相姦であるために断って、別の女を仕向けるシーンがありましたね。あれも『横を向いたまま』に出てくるシーンと似てるな」

「……『横を向いたまま』にそんな話はなかったと記憶していますが」

思わず、えっ、と声を上げたが、紗江の言う通りだった。「横を向いたまま」に、そのようなエピソードはない。陸山は他の小説と混同していたのだ。新田が学生時代に書いたという、未だ原稿を読めないままでいる小説と。

「そうだ、あれからあの小説の情報を新しく得たんだった。娼婦のような女の子と出会う前に、主人公は友人から紹介を受けていたんだそうです。こんな女の子がいる、という感じで。もしかしたら、その友人もまた、女の子と寝ていたかもしれない、というのが読んだ人の意見でした」

話し終えると、また沈黙がやってきた。慌てて一息に説明したために話が呑み込めないでいるのかもしれないと察して、他の情報も補足としようとしたが、沈黙は紗江によって破られた。

「……どうしようもないですね、あの男は」

沈んではいるが、確かに憤りが読み取れる声だったので、陸山は用意していた言葉を飲み込んだ。これ以上情報を与えてしまっては、雰囲気がより悪くなってしまうかもしれない。かといって、他に手だてもなかったので、今度は陸山から沈黙を作らざるを得なくなる。その沈黙は、再び紗江によって静かに破られる。

「その小説はやはり実話ですよ。彼の体験したことを素材にして書いている。しかも、別々の体験を組み合わせながら、自らの引き起こしたことを等閑視するかのように書いている」

一つ一つの音は変わらず明瞭に発せられているから、注意しておらずとも聞き取ることができた。その明瞭さの具合は、剣呑な雰囲気が流れるきっかけを作ったのは間違いなくお前であると、陸山に宣告を突き付けるのには十分すぎるほどであった。

途端に、主人公に対して娼婦めいた女を紹介した友人こそ、新田なのではないか、という大瀬良の推測が思い返されてくる。それも教えることなく飲み込んだ。推測を建てた本人にしてみれば、素朴な考えに過ぎなかっただろう。実際、陸山も聞いている間はありうべき推測であるとだけ受け取っていた。しかし、小説に書かれたことが実際に起きたことであると強調する人間の前に、そうした助け船を差し出してしまっては、いよいよ新田の弁護をする資格はなくなるだろう。それを恐れて、あくまで相手から情報を聞き出すことに決めた。

「……そこまで恨みを買うような真似をしたんですか、新田さんは」

「学生時代に交際していた女性を妊娠させたにもかかわらず、堕胎させているんですよ」

その声は滑らかに発せられたため、初めは意味をつかみかねた。

「堕胎？」

そうした繰り返しも、意味を把握し直すための作業だった。間もなく言葉の重みが意識されてきて、そんな、と不意に出た声とともに困惑がやってくる。

「彼から、大学を退学している、と聞いていなかったでしょうか？」

確かに聞いていた。しかし、陸山が聞いていたのは四年経っても単位が取れなかったから辞めた、という話だけだった。

「単位が取れなかったのは事実です。三年の後半でしょうか、彼は途端に大学に姿を見せなくなった。演習も卒論も履修しなかったから、そのまま退学した。大学生活に飽きてしまったのでしょうね。けれど、それなら四年になる前に辞めるべきでしょう？　彼は豪農を祖先とする名家の出身でして、親からの支援を頼りに一年間、大学に居座っていたのです。堕胎のための治療費も親から出してもらった」

次々と繰り出される情報の速度に、陸山の耳は追いつききれなくなっていた。いつしか紗江の口調が、あのまくしたてるような不気味な色を帯びていたことも、置き去りに拍車をかけていた。

「山形に戻らず、仙台に留まり続けているのもそのせいです。地元でもそれなりに知れ渡ってしまいましたから。とはいえ、ほとぼりが冷めたら戻ってくるでしょうね。おそらく、家族のコネを利用して、それなりの職に就くかもしれません。まあ、作家になる可能性も残っているかもしれませんが……そもそも、大学を中退して、フリーターとして生活しているにもかかわらず、作家になろうとしている、とは随分悠長な態度だと思わないですか？　その悠長な態度がどこを出自としているか、考えたことはないですか？」

相手からの質問に陸山は答えられずにいた。とはいえ、向こうの口調はこちらに対して答えを求めるものではない。憤っているような口調も、通話している相手に対して向けられているのではない。いずれも、この場にいない人間に向かって表された口調だった。

「……申し訳ありません。こんなことを陸山さんに向かって言っても、しょうがないですよね」

紗江自身がそれを自覚した。加速し続けていく暴露がようやく収まってくれたのを感じて、陸山は胸をなでおろした。

「にわかには信じがたいことです。しかし、あなたのほうが近くで新田さんを見てきているんですから、きっとそれは事実なんでしょうね……」

形式としては相手を尊重する態度を示しておいた。とはいえ、近くにいるからなんだというのだろう、という反発がぬぐいきれないのも事実だった。一年という短い期間の付き合いではあるが、新田はそんな過去があるような態度はうかがわせなかった。いかに顔を見せない付き合いだとはいえ、隠せるほど狡い人間だったというのだろうか。陸山は、自らの眼力のなさを突き付けられた気分になった。

「紗江さんは、それをいつ知ったのですか？」

そうした質問自体に意味はない。それで事実かどうかが確かめられるわけでもなかった。ただ、沈黙してしまうことで、自分の無力が証明されるような気分がやってくるのを避けるための質問だった。

「間もなく卒業する、という時期でしたね。酒の席で、近頃新田の姿が見えない、という話題になりまして、そこからそうした話が出てきました。私も初めは疑ったのですけれど、後日件の女性と出くわしまして、事が事でしたから直接には触れなかったのですが、本人も新田の話題を避けていました。後に彼女は休学しまして、そこで確証を得た。ただの色恋沙汰で、そこまで行き着くわけはないですから」

紗江の口調は元の落ち着いたものに戻っていた。とはいえ、折り目正しく経過を報告する様子は話題に反しており、かえって、あくまでも冷静にふるまおうとする抑制の力を感じさせる。

「それ以降新田さんとは会ったんですか？」

「一度だけ。その時は彼を咎めようとしました。ただ、彼は黙っているきりで、私の言葉に対して何一つ応えようとしなかった。目を伏せるでもなく、顔を反らすでもなく、声を荒らげる私の様子をじっと見ていた。思わず手が出そうになりましたが、そこが人前だったこともありましたので、踏みとどまって睨み付けた末にその場を離れました。今から思えば手ぬるかったですね。人目につかない場所に追い込んでもでも、彼に一撃を見舞うべきだった」

過激な言葉でさえもさらりと言ってのける。そうした態度に陸山は違和感を覚えた。しかし、新田の過去がこちらには容易に測れないのと同様に、紗江の心境もまた容易には測れないのだろうと踏まえてみると、安易に口を挟むのはためらわれた。

そのように当人だけが知っている事柄に口を出せないでいると、傍観者としては忖度を拒まれているような気になり、本来なら事実の想像へと向かうべき思考が、あらぬ方向へと進路を変えていく。もしかしたら、堕胎したのは紗江ではなかったか、と。そもそも他人のことに対してここまで憤慨出来るのだろうか。陸山が傍観者として、新田にまつわる事どもに対して距離を置いて接さざるを得ないのと同様、紗江もまた幼馴染に対して少なからぬ冷淡を示していいのではないか。にもかかわらず憤懣を表そうとするのは、紗江が実のところ新田の子を身ごもったからではないのか。

しかし、それは明らかに思いつきの妄想に過ぎない。あるいは、虚構にありがちな展開を、現実にそのまま当てはめるような振る舞いである。固有の出来事に対して、類型を当てはめて理解しやすくしようとする。傍観者として冷淡に事に接しているだけであって、当事者の心情をなんら汲もうとしていない。それは人間としては言わずもがな、小説の読者としても失格と言える態度だろう。そのように思考に向かって自粛を促しはするが、一度踏み入れた虚構の領域からはなかなか抜けられず、次第にまた新たな妄想が浮かんできた。

「そうか、新田さんが『横を向いたまま』から自らの影を消そうとしたのは、過去に引き起こした罪がささやかれ続ける世界を無効化しようとしたからなのか」

不用意なつぶやきだった。しかし言葉に出してみると、それはある程度もっともらしさを帯びた推測ではないか、とも思えた。そうした実感が、紗江に対する推測が妄想であったのと同様、新田に対する推

測も妄想である、という等値を阻んだ。
「他にも様々な事情が絡んでいると読んでいますが、大学時代に書いたという小説のことを鑑みれば、その推測は的を外していないと思います」
そうした肯定も想像をたくましくさせた。
『『横を向いたまま』では、同じ土地に暮らす人々が、お互いにまつわることで知らない話はないという世界が描かれている。そこから、新田さんは自分の影を消して、そうした噂話に塗れた世界から抜け出そうとしている。では、学生時代に書いた小説は……」
「彼は堕胎させた女性に対して、病院を紹介するにとどまらず、精神的なケアを施してくれる男の友人も紹介していたのです」
新たに知らされた事実の意味を、またも陸山はつかみかねた。
「紹介したといっても迂遠な形ではあるのですが。彼女の同性の知人を介して、その男を引き合わせた。それは上手くいったようで、一年の休学を経て、現在彼女は復学しております」
「……でも、だとしたら娼婦のように描くというのは納得がいかない。まさか、自らが堕胎させた女性を、娼婦であるとするだなんて」
「十分にあり得る話ですよ」紗江は語気を強めて陸山を遮った。「何の呵責もなく、世間の耳目を惹く作家になろうとする男です。かつて孕ませた女を、男を誑かす娼婦である、と定義するのは迷いなく行えることでしょう」
迷いなく、という言葉が、再び新田の声を呼び起こさせた。部員たちが一つの話題を巡って議論している最中、出し抜けにアフォリズムを繰り出すように物事を即断する声が響くことが何度もあった。それは紗江の推理の裏付けをするには十分な想起だった。
その上で紗江に対しては反論したい気持ちも残っていた。もっとも、それは相手の説を覆すためのものではなく、むしろ補強するための反論である。
妊娠したのがあなただと仮定しよう、学園中の異性をたぶらかす女のモデルもあなただった、だとすればモデルが二つの意味で一致することとなる、学園で娼婦のように振る舞う女性と、かつての想い人から別の男性を紹介される女性、この仮説が正しいとすれば、新田が小説を書いた動機としては申し分ないものとなるのではないか――
「小説というのはそんなに容易く書けるものでしょうか。いかに実体験をパラフレーズするとはいえ、自らの罪の意識を馴化させるためとはいえ……」
そうした判断の留保は、陸山自身の妄りになる推測にも向けられていた。紗江にそうした過去があるとして、別人の話であるかのように語っているとして、見ず知らずの人間に対してあけすけに語るのは、やはり疑わしい部分が残った。
「ただ、私には最早そうした推測しかできなくなっております。あまりに材料が揃いすぎている」
また落ち着き始めた様子から、陸山は彼女達の過去を思いやった。幼馴染特有の面映ゆさゆえに会話を交わすことは少なくなっていっ

たそうだが、そう断るからには幼少の頃にはそれなりの交流を持っていたのだろう。そして、大学に入るとお互いが造詣を深めていくこととなる文学を介して、切れかける交流をどうにか保っていた。もしかしたら、そこには旧交を取り戻すかのような語らいも存在していたかもしれない。

そんな折、新田が不実を犯すこととなる。陸山も信じがたさは感じていたが、紗江の方こそ、より強い受け入れがたさを感じていたはずだ。そうした比較を通してみると、傍観者としては自らの無力を感じざるを得なかった。

「……申し訳ないけど、僕にはもう扱いかねる話だ。新田さんは音信を絶ってしまっている。完全にプライベートの世界に隠れてしまっている。本人に訊こうにも、彼から窓口を閉めてしまっている。ネット上でだけつながりを持っている人間としては、それ以上踏み込みようがない」

無責任ともいえる態度ではあったが、対応の仕方が浮かんでこなかったのも事実だった。そんな中で不義理を犯すまいという呵責だけでもって事に当たろうとしても、足手まといになるのは明白だ。

「新田はこれから、そちらではどのように遇されていくのでしょう？一方的に彼の過去を暴き立てた人間が、案じるのはおかしいかもしれませんが」

「僕は責任者ではないから、この場では何とも言いようがない。ただ、もう一か月以上姿を見せないからには、新田さんは自分から文芸部を離れていくことになるのかもしれない」

それは半ば願望が込められた予想だった。これまでの活動を通して、新田がTwitter文芸部に対して及ぼした危害はないに等しい。でなければ、何事もなく活動を続けられるはずがない。その点では、新田を文芸部から追い出す口実はない。

第一、これまで話された事実を打ち明けたところで、部員は陸山と同様に受け止めかねるあまり答えに窮してしまうだろう。ネットサークルの特徴には、私生活に踏み込まない気安いコミュニケーションが挙げられる。それに同意した上で各々が活動を行っているというのに、今更この部員は私生活に問題があるから排除しよう、という話は出来ない。

そうであるからには、このまま新田が姿を見せないまま、全てがなかったことであるかのように沈静化してくれるのが望ましい。

「もしかしたら、新田さんはあなたが僕にコンタクトを取ったことを、何らかの形で知ったのかもしれない。そこで自分の評判が悪くなるのを恐れて一時的に姿を消している、あるいは、もう姿を現さないと決心したのかもしれない」

以前打ち消したはずの推測が、今度は声として現れた。

「あり得る話です」そこで間が置かれた。しかし、それにしては長い間だったので、紗江自身も言葉に窮しているのがうかがえた。「だとしたら、これ以上私が新田の消息を尋ねるのは、そちらのご迷惑になるのでしょうね……いえ、迷惑は最初から明らかでしたか」

「そんなことはありません。あなたの義憤はよくわかります。最初は一体何に怒っているのだろう、なぜ事情を明らかにしないのだろう、と思ったけれど、あなたも証拠が一通り揃うまでは新田さんを信じていたのですね」
「信じていた」という繰り返しが聞こえてきた。その後、苦笑が響く。
「やはり文学に通じている方は心情を読み解くのが上手いのですね。そんなことは、一度だって考えたことがなかった。私は、怒りに任せて新田の罪を暴こうとしていたつもりだったのに」
謙遜はしているが、実際のところ、こちらの事情もよく忖度しながら話を続ける態度に落ち度はなかった。
「ただ、新田さんが戻ってくる可能性はゼロではありません。戻ってきた際は、ちゃんと彼と話し合いたいと思います。あなたと直接話すのは難しいでしょうから、仲介役が必要でしょう」
かといって、新田が現実の人間に対して、あるいは小説に対して取るような問題的な態度に解決策があるのかどうか、思い浮かぶアテは依然としてなかった。それでも以降のサポートを約束しようと決めたのは、顔の見えないやり取りの中で最大限の誠意を見せようとしている女に対して、少しでも返礼をしたいと思ったからだった。
「ありがとうございます。けれど、あくまで姿を見せたとの報告だけ寄越していただければ結構です。一通りの情報は得られましたので。あの男に自らの罪を突き付けるのは、私の役目ですから」
静かに発せられた最後の言葉に潜む強い決心を察して、陸山はやはり自分が傍観者でしかないことを悟った。
「わかりました。けれど、一人で思いつめないでください。それぞれの都合がよければ、また文学の話でもしましょう」
「そうですね。お忙しい中、お時間を割いていただきありがとうございました。それでは、今日はこのあたりで」
ええ、また、と応えたところで通話は打ち切られる。陸山は最後に自分が残した言葉を再び頭にめぐらせた。また文学の話をしましょう。そもそも今回の通話も、ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』をめぐって始まったのだった。今や新田にまつわる話によって印象が薄れてしまった、お互いがそれぞれの解釈をぶつけ合わせながら新たな認識に至るための話し合いを、もう一度濃やかにするために陸山は大部の書籍のページをめくった。間もなく、ピラル・テルネラが私生児であるアルカディオからの求愛を跳ねつけるエピソードに行き当たった。
ピラル・テルネラが実の母親であると知らないアルカディオは、この老いた女が誰とでも寝る女であるということは知っていて、待ち伏せしてハンモックへと連れ込もうとする。しかし、ブエンディア一族の始祖ウルスラが固く取り決めた掟である、近親相姦の禁止を心に刻んでいたピラル・テルネラは、誘いを振り切って別の女をアルカディオに引き合わせる。アルカディオとの間に三人の子供を産むこととなるサンタ・ソフィア・デ・ラ・ピエダには、老いた女の全財産の半分が与えられていた。もう半分は、彼女の両親の手元に預けられた。
金によって娼婦の代役を引き受け、夫アルカディオが戦乱の最中に

処刑されたにもかかわらず、サンタ・ソフィア・デ・ラ・ピエダはブエンディア一族に仕え続けることとなる。しかし、家屋や家族が徐々に衰え、どれだけ意を尽くそうとも維持することが困難になり、自らの無力を突き付けられた時、彼女は誰からも見送られず失踪する。

その失踪後も、ピラル・テルネラは生き続けており、かつて二代目の兄弟達を誑かした時のように、私生児の性欲の標的になった時のように、マコンドの街中を浮浪し続けていた。そこでブエンディア一族の滅亡のきっかけとなる、玄孫のアウレリャノ・バビロニアと出会うこととなる。叔母のアマランタ・ウルスラへの届かない愛を嘆いて、玄孫は高祖母に泣きつく。家にこもりきりで童貞のまま成長し、遅まきながらの性の目覚めに苦しむ青年に向かって老婆は、心配しないでいいよ、今どこにいるか知らないけど、相手はちゃんと待ってるから、という曖昧な答えだけを与える。かつてはトランプ占いを得意とし、胡散臭さを撒き散らしながらもあらゆる未来を予見しえた女には、最早往年の千里眼は備わっていなかった。彼女から与えられた言葉を愛の成就の保証であると受け取ったアウレリャノ・バビロニアは、果たして叔母と体を交わらせ、奇形児を産むこととなる。ピラル・テルネラは、かつて自らが固く守った掟が破られた証明を見ないままこの世を去った。

一通りのエピソードを確認した陸山は、この小説が複合的に成り立ったものであるという自分の認識が間違いでなかったと思った。かつて遠ざけたものが、まわりまわって姿を現して、再び危機をもたらす。その危機と対峙するのは、時に本人でもあるが、時に子孫でもある。あらゆる場所、あらゆる時間において、かつて起こった出来事と似たような出来事が起こり、繁栄もしくは滅亡の分岐点が作られる。

小説は現実の事柄を引き写すことによって紡がれるものであるが、時として優れた小説はその後の現実のプロトタイプとなる出来事を生み出している場合がある、だとしたら今自分に襲い掛かっている出来事もその一例なのではないか、と陸山は思った。

ひょっとしたら今日交わされた文学談義は、かつて新田と紗江の間で交わされた文学談義をなぞるようなものであったかもしれない。大学時代は幼少の頃の交流をなぞるような、共通の趣味をめぐってお互いがお互いの心の内から言葉を誘い出すような語らいが存在していたかもしれない。あるいは、それぞれの文学観を成熟させた先には、今日陸山が代役となって為されたような文学談義が存在していたかもしれない。『百年の孤独』をめぐって、お互いの生地と似たような環境にある土地について書かれた小説をめぐって、彼らは自らの過去に向かって思いを馳せながら言葉を交わしていたかもしれない。

だが、それは新田自身の無責任によってありえないこととなってしまった。『百年の孤独』をめぐって為された会話の後に繰り広げられた暴露話もまた、本来なら新田が聞くべき事柄だったはずだ。しかし、彼はそれを避けた。一度目は別の男を引き合わせることによって、堕胎を通じて精神的ダメージを負った女に癒しを与えたという。では二度目は、紗江については、殴りかかってでも罪を突き付けなければな

らないとまで恨んでいる幼馴染からの逃避については、ネット上で出会ったに過ぎない人間に責任を押し付けようとしているのだろうか？　かつて小説の中で書いたように、厄介な女を別の男に引き合わせることによって害の薄い人間に仕立て上げようとしているのだろうか？

文学談義にまつわる反復ならばいくらでも引き受けることができる、と陸山は思った。実際、紗江との文学談義を通じて、自分の認識は少なからず変容してきている。それが良いことか悪いことかは未だ判じかねるが、これからの人生において欠かせない認識になるかもしれないという予感は現れている。そして、それは新田の存在なしにはあり得ないことだった。新田の存在なしには、紗江と出会うこともなかった。

しかし、後者の反復については、不義を犯したことで襲い掛かってくる糾弾の反復については、到底引き受けることができない。『百年の孤独』ならば、血は争えないという紋切型ではあるが抗いようもない認識によって受け入れられるかもしれない。だが、あなたとの間には血のつながりはおろか実生活におけるつながりさえもない、と陸山は目の前にいない男に対して強く訴えかけた。確かに先程は協力を約束したが、それはあくまでも彼女の人格に対して敬意を表明しただけであって、あなたに対して協力を表明したのではない、と自らの判断についてまわるだろう誤解を取り除こうとした。

とはいえ一方で、と陸山は思考を別の方向にめぐらせた。実生活におけるつながりがないのであれば、紗江の暴露が真実であるという保証もないままだろう、と。協力を約束した背景には、新田が改心するだろうという見込みもいくらか含まれていた。そしてそうした同情心は、新田はそういうことを仕出かす人間ではない、という思いも内包しうるくらいの大きさは備えていた。

一通り考えをめぐらした末に袋小路に至りついてしまったのを悟って、陸山は時計を見た。気が付けば日が変わっている。これ以上ネット上の事件にかかずらってしまっては、実生活に支障が出るのは明らかだ。陸山はパソコンをシャットダウンし、就寝の準備に取り掛かった。シャワーを浴び、寝巻に着換えて、ベッドに身を横たえる。一連の動作をこなしている間、くれぐれもネットにまつわる話は頭に上らせないようにした。目をつむっている間も、翌日自分がこなさなければならない仕事について考え続けていた。一通りのスケジューリングを済ませても尚寝付けなかったから、今度は温めている小説の構想を改めて練ろうとした。モチーフにしようとしている外国の歴史や土地柄について整理し、その中で活動する登場人物達はどんな性格を持つべきだろうと思案していると、間もなく心地よい睡眠が訪れた。

陸山が編集長を担当した『Li-tweet』は何事もなく発刊された。原稿の漏れもなく、校正も滞りなく行われ、予定期日までにすべての作業を終えることが出来た。

「いやはや、お疲れ様です」

Twitterで発刊した旨を告知し、一段落が付いたところで大瀬良がねぎらいの言葉を発した。
「大瀬良さんこそ。毎度厳しいスケジューリングで申し訳ないです」
陸山がそう返したのも、雑誌が企画されるその都度編集部員が変わっていく中で、大瀬良だけが毎回すべての原稿をＰＤＦにまとめる作業を担当してくれていたからだった。
「いやあ、初めの内はともかくとしてもう慣れたもんですよ。それに最初は上総さんに頼りきりで、何にもやってないも同然だったしねえ」
「ああ……否定できないところです」
含み笑いをした上総の声が高く響いた。控えめながら、皮肉は確かに込められている彼女の言葉に部員たちは一斉に笑い出した。
「実際今回も助けられなきゃならんなあ、と思っとったんですよ。原稿が多かったからね。でも、なんとかなった。これからは大丈夫です」
「一人でやれるよ、って自信満々に言う子供みたいだね」
流川が言うとまた笑いが起こる。標的にされた格好になる大瀬良は、それも最年長の役目だと言わんばかりに、怒りもせず話を引き継いだ。
「まあ、上総さんがいなくなる前に引き継ぎは済ましとかんとならんからねえ。送り出す人間としては心配いらんよ、っていうのは当たり前でしょう」
「すいません、本当に。私情で部に迷惑をかけてしまって……」
やや震えた声で申し訳なさそうに言う。彼女は私生活の都合から『Li-tweet』の発刊前に休部を申し込んでいたのだった。
「所詮こっちはアマチュアの集まりなんだから、私情の方が大事ですよ。免許取るんでしたっけ？」
「はい。山形の方にまで」
「でも、関東で暮らす分にはそこまで車は要らんのじゃないですか」
「そう思って今に至るんですけど、意外とそうでもないんですよ。それに、転職にあたって、選択肢は増やしておいた方がいいと思いまして」
「ふうん……しっかし、東京の鉄道網は旅行するたびに苦労させられるけどね。あんだけ電車がつながってればいけんところなんてないように思うけど」
「凄いですよねえ……私も初めの頃は本当に苦労しました」
「オフ会で東京に行った時も苦労した。新田さんと同行したんだけどね、私が愛知であの人が宮城だから、半端な都会人同士が寄りあうと余計面倒なんだわ。田舎者ならちゃんと立ち止まって考えるんだろうけどね、お互い立ち止まることが恥ずかしいと思っとるんですよ。東京ならともかく、名古屋や仙台で立ち止まってると目立つでしょう。だもんで、半端な見当のまま逆の道に行くし、やっぱりこっちだったろう、って言い出さずにいた見当を今更のように主張し出すと、そっちも間違っとる」
「ああ、わかります、それ」雨野が言った。
「でしょう？　まあ、なんとかなったけどね。新田さんも楽しそうに

しとったよ。世田谷まで行く道中で見つけた綺麗な人のことを始終話題に出したりしてね」
「意外だね。あんまり女には興味がない人だと思ってたけど」流川が言う。
「そりゃ流川さんに比べたらね」と大瀬良は冗談交じりに返した。「そういや、新田さんは山形が地元だって言っとったね。意外と会えたりするんじゃないの」
「そういえば、結局新田さんとは連絡がつかなかったんですか？」
そう訊ねる上総だけが、ここに集まっている中では、唯一紗江の存在を知らない部員だった。ああ、そうだね、と大瀬良が間を作る内に流川と雨野は黙ることで各々の立場を表明しているようだった。一時的ながら部から離れる人間に、込み入った事情を話しても意味がないことだ。一通りの文脈を踏まえて、陸山も彼らと足並みを揃えることにした。
「案外、山にでも篭ってるんじゃないの。山寺とか行って、俳句に目覚めたりしてるかもしれない」
「だよね。そっちの方が似合うよ、あの人」
親密に交友を交わしている二人としては、いつもと変わりないやり取りだったので、冗談で紛らわそうという態度は微塵も感じさせなかった。実際、二人としてもその程度の誤魔化しなら造作もないと思っていただろう。彼らは新田の過去を知らないのだから。
いかに新田と馴染みのある人間がやってきたとはいえ、所詮は個人間のいざこざに尽きるのであって、こちらは橋渡しくらいのことをやればいいのだろうと思っているからこそ、彼らは渦中の人間を軽く話題に上らせることができる。実際、陸山が同じ立場に立っていたとしたら、彼らと同様の態度を取っていただろうから、口は挟みかねた。
加えて、新田の過去を明らかにしたところで、そうした事実が彼らに対してなんら影響を及ぼすものではないし、ネット上の付き合いしか持たない人間として出来ることはほとんどないに等しいのだから、陸山としては話題が尽きるのを待つほかなかった。
「で、どの辺まで休むの、上総さん」大瀬良が訊いた。
「転職して軌道に乗ってようやく、と言うところですかね……」
また申し訳なさそうな震え気味の声が響くと、ええ、という大瀬良の煽り立てるような声が重なった。
「そんじゃあツイ文が無くなってもおかしくないよ」
「さすがにそこまでは残ってるでしょ」流川が口を挟んだ。
「せめてツイ文が無くなる前には帰ってきてくださいよ。こっちとしても浦島太郎みたいな立場に置かせるわけにはいかんからね」
「はい、くれぐれも気を付けます」
半ば理不尽な要求を突き付ける大瀬良に、上総は苦笑しながら応じた。

一度目の技能教習を終えて、待合室の長椅子に座り一息つくと、上総は自分が山形に来て以来初めて深い息をついたかもしれないと思

った。
　見知らぬ土地に足を運んで数日間を過ごすというのはこれまでも何度か経験したことだが、大抵が観光のための旅だっただけあって、気楽さが大勢を占めていた。大体、観光にあたって自分の身分は半ば忘れられる。見知らぬ土地に移れば、普段自分を規定している職業やら経歴やらは一旦切り離すことができる。ただ今回は、免許という自分の能力を規定してくれる資格を得るための旅だった。見知らぬ土地で、自分がこれまで知らなかった技能を手にする。先程まで隣に座っていた、年配の男の教官の呆れたような態度を併せて思い返しながら、彼女は今更のように今回の旅の難しさを確認した。
　確かに今更ではあるけれど、と上総はすぐさま自分の遅まきながらの自覚を弁護した。乗り換えなしの新幹線に乗ったこともいくらか影響していた。東京に比べれば都会性の薄い地元から新幹線に乗って、道中は本を読んで過ごし、気付けば目的地に着いていて、駅を出ると古びた街並みが待ち受けていた。駅から続く一本道は視界が開けていて、四方八方を山に囲まれた盆地らしく小高い山と晴れた空が見えた。立ち並ぶ家々もことごとく古びていて、下ろされたシャッターは茶色く錆びており、所によっては塀が崩れていた。むろん人通りはおろか、車通りすらまばらだ。自動車学校からの送迎バスは、信号以外で立ち止まることがなかった。
　そんなこれまで見たことのない風景をどうにか自分のものとしなければ、これからの半月は送れないだろう。教官の訛った声も、取り込まなければならないものの内に含まれる。そんな中、待合室に座って、ようやく風景からも人からも切り離された一人の時間を持つことが出来た。そこでの一息は、これまで体験した諸々を一旦外側に押し出して客観視することで、自分を保とうという仕草でもあった。
　とはいえ、それもわずかのことだ。一五分の休憩の後、次の教習が待ち受けているのだから、あまり振り返っているわけにもいかない。時計を見ると、時間が迫っていた。
「上総さん、いらっしゃいますか？」
　出口の方で若い女性の声で聞こえ、また息がつけた。どの道教わる立場なのだから恐縮はしなくてはならないのだが、相手の年齢が近しい上に同性だというなら、気の置ける部分は少なくなる。
　はい、と立ち上がって手を上げると、向こうの方から近寄ってきた。こちらから近づこうと思っていた上総は、動かしかけた踵を一度地面へと戻した。
「担当の押切です。よろしくお願いします」
　左胸のネームプレートを示しながら会釈をする相手に、こちらこそ、と頭を下げた。頭を上げると、こちらを真っ直ぐに見つめてくる女の目があった。
「エンジンのかけ方や、発進の仕方は教わったと思うので、次は実際に走らせてみましょう。といっても、一周をゆっくりと走るだけですので、ご安心ください」
　先程の男の教官とは違い、次にやるべきことをしっかりと伝えてく

れる姿勢に思わず背筋を正された。明瞭に発せられる言葉といい、眉毛のところで切りそろえられた前髪から覗く切れ長の目といい、自律したところを感じさせる女性だった。何より、訛りのない声が上総に気後れを覚えさせた。

「上総さんは関東からお越しになったのですね。どうですか、山形は。何にもないでしょう？」

手元の資料に目を落としながら、こちらへ視線を送る事を忘れずに話す相手の態度は、これまで会った教官とは違っていた。人の好さは感じさせるものの、どこか無造作なところのある、地元特有と思しき立ち振る舞いを彼女は見せない。

「それはまだ何とも。下調べをしたら名所がいくつかあるようなので、これから探そうかと思います」

「そうですか」と相手は微笑んだ。「では、参りましょうか」

そう言って歩き出した彼女の後ろに従いながら、地元の人ではないのだろうか、あるいは、一度他所に移り住んだことのある人かもしれない、と推測を付けつつ、後れないように足並みを揃えた。仮に遅れてしまっては、自分こそ田舎者であると証明されるのではないか、という弱いながらの強迫観念が上総の頭に上り始めていた。

一度目の教習で教わった通り、周囲を確認し、ドアを開けて運転席へと乗り込む。そうした上総の動きを、すでに乗り込んでいた女は頷きながら確かめていた。シートやミラーを調整し、シートベルトを締める。

「では、確認の意味も込めて、エンジンをかけるところまでお願いします」

相手の促しに応えて、クラッチとブレーキを踏んでキーを回した。金切り音が高く鳴り、軽く車体が揺れる。

「大丈夫みたいですね。では、今回はあのコースを走っていただきます」

そう言って運転席側の窓を指したところには、すでに一台の車が走っている楕円形の模擬道路があった。

「まずは一周。ゆっくりでいいですから、エンストだけに気を付けて走ってみてください」

そう言うと上総から目線を外して、女は前を向いた。肩のところで切りそろえられた髪が頬に重なって、目を隠す。そんな彼女と視線を揃え、固くなっていた姿勢を和らげる隙を得たように感じた上総は、ネームプレートに記された「押切　紗江」という名前を思い返しながら、どこかで見覚えがあるのだけど、と記憶のより深くの方へ手を伸ばしていった。

〈次号に続く〉